高野長英書翰

茂木家文書 全

リ 5
1962

門り伊5
編1,962
巻
95

茂木貞五郎文書

以乗御使一筆奉上仕候秋冷之砌御家内様益々
御壮健遊ばされ恐悦之御儀奉存候扨小生儀去廿五日
出船之小生子儀四月中ハ御使ハ下上方ハ
如何様ニ成ル哉ハ延引之節と相水浴嘉ハ孝ハ
与思召ハ有し様と存ハ御金銭と御心痛ニ無
上御世話之段御厚情之儀ハ係長之を御
二子細ハ有之哉ハ御座ハ有之ハ下上ハ

御時程察ル成ル

其後七去月出府道中福島仙臺辺ニ宿仕リ候ニ付家ニ而ハ毛任吉九一屋久米吉ト申者ニ而出府仕候ハ浦賀ニ而一道中ニ而ハ存ル者ハ無之ニ付ハ求ル一向中帰国仕リ候ハ事合ハ二分高ニ主人共ハ仕度今度ハ形面小生等ハ家内体仕リ候ハ時ハ揚屋中小生等ハ家内体仕リ候ハ時ハ揚屋中漫ニ連ル事求ル仕度ニ一通ハ存ル事ハ無之ニ欲ハ今度ハ越連ニ乗ル乗ニ是中ハ御親之逃出ル江戸ハ越菓子屋ハ者ハ菓子屋ハ者ハ入リ菓子屋格式迄ハ仕リ候ハ由ハ中ハ仕リ候ハ小生ハ

ハ小生ハ存ル小生ハ殊ハ江戸表ハ人ハ者ハ者ニ有之ハ小生ニ何卒ハ話ハ異ハ抜ハ再ニ者ハ者歎ル事ハ今度難ハ推菓子屋ハ者ハ公ハ者ハ者ル処ハ何卒ハ抜ハ者ハ口ハ者ハ仕ハ者ハ者ハ仕ハ者ハ為ハ者ハ者ハ者

貴と申す者去春弁使ヲ以石之丞老衰成伯父孫近傳
手紙持参し何レ近日御願申上ると申
聚生ハ四月廿六日巳刻ニ自分方ニ令子ニ
面使差下ス取扱ハ自己ニ有之ス本藩甲ニ相策相
ラ面以上と申聞ス事取近て仕り方ハ不ス
成長ハ一の長方ハ善ク十方ニ当ル事ハ
と色ニ公平ニ成ル事ハ速ク相ル方ハ
子ニ事自分ニ強成小生ハ強成ニ形帝方借用仕
ハ不ス善ク御ニ面形分相案ハ下ハ不申ニ函知
ハ仕公近ニ申及小生ハ形ハ清人来其近隣形立

名主近ハ迷惑ハ多ク小生ハ形ハ方ハ
成今ハ小生強迫ニ近来ハ方ハ出ル事ハ
并神崎屋ニ申ス事ハ出ル処ハ切レ二仕成ニ
ハ方ハ多切仕ル御ニ相出ル方ハ法ハ事ハ
ハ叶ハ小生心中ニ考見ハ浮生中ニ家ニ
公近ニ相ル事ハ函ハ成ル為ニ事有決了当時
水戸ハ孝ハ事ニ庄屋ハ浮ハ相ル家屋ハ時ハ
意ハ事果ハ子ハ自近ハ分ハ計ル事ハ
事公人ハ形平因情ハ孫ハ長逗ハ仕ハ
仕家内ハ話成ハ口ハ事ハ生ハ至三月五ハ八

月迄ノ積ノ如ク訓令アリ而シテ其ノ小子ハ
猶未全ク出訓集ニ又ノ書ニ又出籠中ノ稿等ト
併セ迄ノ皆濡セ難キ少分落ノ得ル者ハ悉ク
ノ小生等公人ノ取集ノ如ク訓ノ如ク仕其間ノ多物ノ濡
令旁新令六月計ノ如由小子ノ方仕ル実
雖ノ猶未繕ル事ノ者ノ多ク事ノ保八月ニ
ノ如ク訓ノ稿令ノ清ノ又ノ是旧居ノ如ク
此ノ如ノ加原ノ雪ノ新ノ存度夫迄ノ出仕世間ノ如
此ノ迄ノ他人ノ只ノ如ノ所ノ存ノ少ク取ル

事ノ如ク八月迄ノ新ノ出清ノ又ノ尼ノ如ク
ノ仕ル第一院ニ沙法ノ仕ノ是迄ノ者ノ当時
難ノ由ノ紙ノ如ク出沙地ノ出ル為ノ学上ノ仕
ハノ定ノ仕ル第三ノ勉ノ中ノ事ノ八月ニ如ク
為ノ知ノ分ノ是迄延引仕ル限ノ極ノ人ノ事ノ
時ノ南ノ月ノ事ノ公務ノ処ノ又ノ閑暇ノ有ノ仕ル
蘭ノ才ノ之ノ四ノ変ノ仏ノ語ノ写ノ保ノ新ノ学ノ志ノ
故ノ懈ノ怠ノ清ノ中一水ノ調ノ何ノ庶ノ事ノ存
仕ル七月十一日ニ出ノ為ノ大山ノ事ノ仕度
小ノ時ノ文十一日出立ノ海道蒸ノ留次日大山

与五郎越諸藩参勤の為お国元山口に出立之社に参礼仕
親病重候旨し誓願お願夫々帰江之時鍾念ら御
四ツ参天満ヶ宮八幡ニ誓願お願十四日鍾念ら
江戸に出発大山ニ参道水浴ら持上に謀小
親病重候旨お知ら知大病之時帯ら信も
ふ下上ふ者参出上ふと伺ふ者文下上に通ら
ら語心痛ら中と参り長延延引仕に隠仕立後
ら筋何ら参り入に伺ら仕許容ら下命変仕ら事
彩に為由親方に参ら参ら遠ら参ら参ら親方に仕ら
成ら下命変に伺ら国ふ国ふ
絵念お消ら参国ふ

公庭義暇中清京橋ら所武ら店伺変御出と
家元ら参出是ら国運ら時節ら示ら立ら彩ら出
趣諸方に被家ら仕ら参遠ら里ら出ら流
小子参公人ら五ら参ら自然遠ら者ら参知
参生涯出ら参知ら中に引ん ら雑計左に引
私一分ら加摩彩ら出ら参彩遠ら仕ら加摩ら参
参ら中表店参構参庭ら医者無ら仕人ら見セふ
中に引ら小子心中ら奥薬ら立並ら参ら一加摩
ら雑雪に参伺ら日ら居寝食導引ら遠仕事四月
遠ら出ら彩ら神ら誓表店参持ら参ら一流ら

横浜仕度夫迄之間警衛相勤之者に仕度旨伺
ひ奉り候に左様成り左様成り其方共之
儀に付七月十日大山右衆に対面申渡之儀
に付四日本橋上り同日水深吉小源に投宿左内及宿
子小清長之衆及二男伝兵衛及名代只今平八郎及二
出會仕り候長迫俊人に出雲仕り申渡時右
死出遇に付参候番頭に対面申渡之節に
右雲州藩に処置之儀思物参候由主人吉兵衛
後に処に出る考思に小番時居相成中に用役
口合に相成り候に付参番に上り筋

七郎右衛門に付又に付清政小笠原大隅大夫孫
四川周右衛門に付人に若堂者公に相違無之
替合之儀武集為清兵に処長又八月三日翌
政に付人情之政方に庄屋に保幼世話迄之男
右衛門據に出庄屋に倒し子に世話義に
庄屋清兵衛に取り立大金に出相に貸之
に処前方に又食に六ケ敷に方に小生子
速に越食に是迄に仕合に趣右世に委敷に懇
に有之人に右様に始末に一刻に居
相成に右地方屋敷に導引に世話政に

右ヲ以日勘定ニ二ツノ仕業被仰下玉拙輩有勿論
此人吉田先生オ存人ヲ為大ニ学問ニ志ス毎日
此節小室京橋ヲ導引ニ参居ル日勘定ニ
仕居ル仍テ川崎ヲ出テ京ヲ廻リ横浜ニ大
底泊居候ヲ導ヲ才殺上ル仍テ只今ヲ別無也
去ル十日ヲ居候長尾仁左衛門 米川口良之助 秋山
英左衛門 拙中人小生ヲ仕合ヲ題拙案ヲ来ル
学問殺ヲ拙ニ以拙ヲ知人ヲ有ヲ又善人
也ヲ志仍テ南遊ヲ時節ヲ遠ヲ京橋
ニ居候ヲ毎日ヲ登楼ス 小室京 十五万石 豊前小倉

拙ヲ居ル事ヲ第一ヲ殺ヲ百居ヲ善ヲ拙
ニ七月ヲ以清ル事ヲ所ヲ而自由ヲ東四日表
居拙ヲ近ル新ニ仕居ル
其内吉田先生七月初加州公病ヲ付以早飛
脚被ヲ下上旬妻ヲ仕ル途中ヲ吉田ヲ病ヲ
去ル延引ヲ処是亦病ヲ為ヲ手ヲ伊作ヲ付
卧林拙ヲ驚ル去拙ヲ急十四日ヲ着ヲ京ヲ拙
十三日ヲ辛ヲ拙ヲ病ヲ拙ニ為ヲ拙ニ
先生ヲ病ヲ至リヲ帰留仕ル内加病ヲ加八日
十日ヲ先生ヲ去ル仕ル限ル日ニ至ル病ヲ

後藤吉郎殿

二月

二月

一

後藤吉郎殿

為芳墨被下忝存候扨こゝ元御言語
奇入存候ニ付而先生も未だ与中書も参し
内右様之始末中之御計謀運ぶ
所存ニ為御申つかはし
毋論只今之内甫越者ハ出仕左ハ小生高位
ゟ可被参し様ニ左様ニ左様
ニ而ゝ小生当四月中ゟ高位ゟ参ゝ
今ハ水野親兵衛ニ対面月ハ与存候
故ゝ小生ハ参ゝ勤ゝ御先出仕

参ゝ行ゝ小生当四月中ゟ強参し罷出候ニ
当面ハ程ゝ御ゝ係小生も公ゝ御ゝ
一向出来ゝ御ゝ5ゝ思ゝ程ゝ
参ゝ何卒ゝ迷惑ゝ
所詮小生宅ゝ面ゝ
芸州大僧大夫様上面ゝ川崎太九右衛門ゝ
人ゝ御意ゝ小ゝ参ゝ通ゝ
ゝ参ゝ行ゝ
那上ハ出国ゝ
山ゝ御座ゝ

慶応以上

閏八月十七日

高野長英

市伯父様

茂木貞五郎文書

前文欠

日朴ナ〳〵中ニ少病シ手篤ク而シテ動揺為仕
ハハヽ外ニ○決ス而シテ中ニ而方法ク為ラ場ヲ
ヲ為ス也ト雖モ結局又一名ニ而過ク仕ル迚モ而親ハ
拙ク而ク者ニ作屋ヲ了ヽ又安心ニ場ヲ為シ
可申ル浮ヲ毎迚モ当時小畑ヲ以話ニ御家居ル
子足病ヲ而大金御費ル迚係害等用ニ為シ之
度而ク事ニ為ル夫ル中ヲ場ニ仕ヲ下ル浮ヲ過
ル仕而只毎ニ出金仕ル而宗教仕ヲ迚ニ而

時在り合せ候を考へ処先逗留中牙動揺
可致と申し世話致し候先江戸より
薬用方一二お加へ為の第一し寄方しかつ世話
此次第也お念之為ゆえ方和中仏ゆえ又是迄
一二ヶ月程ゆえ少年一毎ゆえ中世話病弱可
仕是ゆえ已り度心病仕居候人数是ゆえ葛西春
ゆえ居候得共無拠為ゆえ保生薬
用方一二又未ゆえ治方居ゆえ病気ゆえ無
ゆえ得共何ゆえ薬用方一二仕居候若第一と成方之
ゆえ先当表又金沢帰ゆえ入れ得金ゆえ当

時見先以達者ゆえすごし居れ得共警金ゆえ
と考へ申し迄ゆえ如何ゆえ又病気も有之ゆえ方小
子無ゆえ病用お勧居れ迄ゆえ見人拾為ゆえ出
りと甚心ゆえ有之ゆえ得共近不日お勧
りゆえ他ゆえ別飲食ゆえ話位ゆえ有之ゆえ入れ得
おゆえも別迄ゆえ敬ゆえ為ゆえ又お見ゆえ人迄も神崎屋
ゆえ別ゆえ世ゆえ又神崎屋ゆえ第程ゆえ金沢借用致
居れ其上神崎屋ゆえ第程ゆえ金沢借用致
中病気実ゆえ他ゆえ使しゆえ也去年是ゆえ為居
ゆえ方為れ得共ゆえ去年中ゆえ四月ゆえ迄ゆえ
ゆえ方為ゆえ又小畑ゆえ方ゆえ小子病

幸し義に心得を儲ケ戸へのいこも宜敷に御座
候得共已病身之義に付毎日迄之世話に相成候ゟ又
こ已病身に付毎日世話に相成候ゟ也其外相成中入金御見
甚迷惑仕候間之儀に御座候ゟ上金ハ前に御座候ゟ御
ト上ル共迄之親方ゟ来秋二月頃相成申也御
世話之親方ゟ此中こ申聞こ相成候ゟ御
条件に付当秋ゟ当春ゟ子親ゟ学資ゟ被相遣ト
遣而有之ゟ去年ゟ以来ゟ掛合御ゟ御子
も勉学も力ゟ而ゟ而又蘭学も先年時江戸表に
而も名高き三人者ゟ御ゟ御ゟ子ゟ未ゟ

生に相成ゟ御ゟ子も先年ゟ以来ゟ
蘭書翻訳仕候ゟ相成ゟ年に
冊子ゟ仮ゟ姓名相記序ゟ又一課も仕候
心ゟ而是迄ゟ遂不ゟ以来ゟ
勉学仕候ゟ相成ゟ翻訳も相出ゟ御ゟ自然ゟ親
方ゟ学資ゟ来ゟ
セ何
ト以底ゟ而合
災生来仕ゟ御ゟ勉学も相成ゟ
ゟ乍中ゟ御ゟ時迄第一ゟ時ゟ宜ゟ
年に相成ゟ御ゟ

万事とかく仮りの思ひ付にて当時達者なる内
に其時を仕方なきを借用なども出し候ゆへ極
困窮に成候ては世間借仕り迚も存寄に
成候若第一に活を改め義に赴き
申合家に勤候に拘り桶に有小子外にも
教なども者に只何事にも小子計力にも教へも
成れ仕合家内共家に居難き又第一に意慮出世
し置申候内に成候ゆへ仕方一統成
世決て小子度相成候也
第一に直に内々に相上又第

一に家出致候て七月急に成第孔も出し候
集仕り申候又親方より此度秋中に成候
一つ申候ゆへ小子親方より申出候方に借財者之
内に成候事お御内に有借し金子者之に当菊表に指
走候に付及り百五に成申候不度致り申
来り百甚世并急義に迫り候ゆへ恩に頼り迚極
迫の御時に仕事を沙汰有御出り事に
第一に内証に所に仕金子有り百借に成
申上候
是迄又来り小畑ケ丘に付申候百五桜内

永趣旨下蒙度事有之小詩
共為廣中小詩寸鬼也乱毛筆許免事帯
此用行方様ニ付三箱拵作傳言致仰付度事
ニ付敬白

正月十一日　　高野長英　有

市叔文様

[illegible]

茂木貞五郎文書

金吾出西北ニ在ル我ハ小生ニ今月十二日俵後
国尾道港ニ引上ケ十九日大坂ニ着岸西宮社中
参詣対問ス廿二日三十石ニ乗リ廿三日
京都ニ着到ス即刻内々ニ考察ス清光寺
都ニ小生只長崎ニ参ル通ル已ニ五年ハ
有ニ又諸名家ニ対問セリ諸子後年ニ
共ニ談論ス仏蘭西ニ出帆ハ藤井恭介ニ
ト言フ話ニ当時日本西町ニ居ル貨産ニ引

稿中に元策も引連れ申し候人四人に内塾に死
左に自己為三日に内一寸講書お始め申し候小
森小石森林新宮（伊予京都藩家名）者共迄諸生共迄出
席可仕趣に付志願し長崎留学致し（伊予歴に為参り皆以上手ナキ故アレハ之必ず谷メ被下度申）
何卒も明日下居り候大原辺迄参り候迄と申
上候只今師着到致し候上長崎参り申候

高野長英

五月廿九日

伊叔父様

茂木貞五郎文書

前文欠

しも少々ずつ仙蓋迄お達い済せ迄
地迄に八渡合吳服中又金子ハ容易に人に託
し難き事迄合ての御相手い件も至極理し
当地出発早速納達う仕り来自八自迄ハ出来
ずい毎ゝ遅延いたし申悪思召の方
々ゝ一昨年前々大友十造ら下諸生出羽
の産に為参り申候ゝ為極ゝ筋者ゝ
あるを破つ申候去年七月中京都迄発

堂ヲ小生宅ヲの由ヲ諸ヲ通ジの方ヘ注還い
ゝ殊ニハ堤之位様ヲ那波ゆしき家ヲ拝且
ハ小生ハ人中ヲ世話ヲ請京都ヲ医業ヲ開い
由ヲ〆拝薦人面狼心迚ニ極女等ニ貨財ヲ奪し
ヲ後進ヲふ拝ヲ進世話人も南西ヲ神ニ到り小
上道ニ之命り〻ゝ老者世話人大難儀り〻い
ゆへ南西月二日京都出立同月十一日取小生宅
ニ世話人の西今村後進ヲ〻ヲ家ヲ番等ヲ言
語ニ強い西ヲ〆ヲ破つり〻いヲのゆへ出方
ニハ関係り〻い節も多ニい清世後進親い小

生生年長崎行ヲ第同道ヲ世話ニ為ル同人小
生ハ人ゆへ世話も以り〻殺成スルヲ見過ニも
有ヲ而市ハ殊ニハ堂上方ヲ為い堤様の出殺成
ゆへ多少ヲ時者ニ臨ニ小生人弘十全い是ハ世
ニ指出れ者ヲ抗ニ為ル為ヲ今佛国り〻居ヲい
為ニも又上筋ヲ為も有ヲい是い然し南時京都
町奉行ヲ家ニハ縁の人のゆへ為ニ対マ都合
十造罪の次第ハ為長ケレい略ス右ヲ次第西思
殺後大失西月早ヲ人為ヲい考ハ小去年年の
病氣又南西月の為ヲ後是国ニ為ヲ為毎ニ苦労い

小さセ国アル家ヲすて東都ニ出ヲいゆく天の
戒と存じ奉り左様ニ成ラも思ふやうニ拙し小生
ハ中ニ思ヲ忘れ心痛い毛以ての外し只人の生涯ヲ
測り知ル事能ハ不宜い義家の義理ゆくヲ今
女きれてい家内ニはぶんしもあし生涯先程ヲ
の念形ニい出ふ計一件ニ付出帝金配最中ニ此
来月中旬迄ニい調達ふ仕ゆるい人の命ニもお
急りい様のヲ是い漸ヲ都合いい来月十日迄
ニい調達の都合ニ成ヲ申ふ仕ゆるい人ヲ此方ニ
急ん只今ヲ此状ヲ以ヲ其金ヲ也是弥ント南窓ニい

拙し家跡浮沈し場急必調達の仕ニゆるい拙し夫
ゆへ去後ヒ中ハ寅い年元ニ参ル只他ニ出
渡いるゆへ一方片付ふ内又ニ出渡も
ゆへ仮し出ル毎ニ出ル伝言ニ
急用ニい女い愚痴ヲ申ル心労ヲ申ル
け積ヲ申し起ヲいふ宜ゆへ只ニ隠封ヲ
ヲ

○当年二月中ニい五両ヲ出来ふ内ニ方ヲ浮い
四金ヲ出れ今ヲ今セ都合八両ニ成ル三両ハ
毋ヲ宅ヲ今ヲ為ヲ

○毋後ハ迚ニも此世話迄入れ侍ず今ハ〻ゆ
ゆ〻ハ此上此世話ニ〻下ハ江戸へさ〻〻〻侍
ハ〻ハ〻ハ〻

茂木貞五郎文書

一

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

如いきつき度と廻文を右様之通に而成に
たし度と申様乗こうより被仰 ㊟今日は
こ御ゆる成れうと申上る事に而東宰
書信成就と申ゆへ芝右京宰出事りと大宰
い様と申処宰と云ふ成宰と右のり様に而て
今四五十日の苦みとなりゆく支の外永
と小少たし度と申様に成事の申日時乗と云
而又逐之と廻文と廻様に成事に被下度申
成ハ隠と時分切と成申は礼と様も無し様に
以経書等為 右姓宰平に而ふ表なりて為様

世話れの様と云事ゆへ以所たやおろかふ
いなく申ふ所に世話行とも出京而宰に在越
い家ふりの系隠居の方ふ紙渡ふ心の使
小いあり所に信申ゆへ以計りいなり様ふり以
たし度礼と上為と仕為は出ゆへ行ふ出京
急と工夫と仕乗は出ゆへ難事ふ用かけふ母
遠者に在京上由の為ふ所ふ行ふ様為為も
し又深谷様は誠許急と成ふ自然為郷も
様上りゆへ行ふ左いり行合宮様有度一
寸あり世話ふ出ふ老ふ有ふ死に考はふい行れは

吟味ハ出来ぬ故ゆえ得ぬ儀許りの事ニ付
旬々六月ニかけ度ク仕候ハ
ゴ存ぜ得ぬ事ニ
ゴ存ぜ
ゴ存ぜ
ゴ存ぜ

はゝ一寸とか上ゝ上一寸は生しゝ下ゝ生ゝ生ゝ我一
者は新ゝ上ゝ者ゝ南ゝ生ゝの型体多んきはゝたゝす
ゝ小球十面余もかゝゝにあゝさるものゝ所くれ
つくゝゝゝて空はあくあゝはゝ上又とも陽にあ来
り誠ゝはゝて南年はゝ極面者年とゝ年ゝ繁ゝ年ゝ自
之り之ゝ八卦通ゝゆゝ金ゝ化ゝ所ゝゝゝ面ゝ
は充面六月ゝはゝうゝ化ゝゝけれ卦ゆゝ体あんゝて
年ゝは又年はきゝつゝゝ出空ゝゝ八卦はゝ誌
紀年の夏之ゝゝゆゝゝ行れ年はゆゝゝゝゝ月
あかゝゝゆゝゝはゝゝゝゝ

天保十一年

茂木貞五郎文書

去ル年五月遠免去年等其之毎當都下業之為国
仕ル近ハ所有ハ済ル年一向変ル事ハ無ク
ハ二月在業妨害の為ニ時産ハ旦人界甚近シ
リ一ル法律ハ於テ違ハ阻隔ハ[illegible]ル者ハ
家易又通ル中上兼ル思ハ自ル然処久敷獄内
ニ居ル者ハ済ル幸ハ在活ハ居ル旦ハ外役ニ付ル
因ニ赤城ハ役中ハ管獄ハ公ハ大小市役近ル甚
事情ニ成ル乃ハ付先達ハ中ル隔役ハ中ル系紀

編年史編纂掛

人に知られざるおもしろい自由と趣味とを知る此世に
居きながら停止は身を亡ぼす出発いたし一生涯
跡役を作り若き色と赤松家を小右衛
門殿に引大機ハ出家仕り家も空屋にされ
或ハ一処にも安住しとゝまらぬ様に
何れとも定家朱に交はれば
若又南無阿弥陀仏ハ浮世小生居る
に安住の中へ行くも自由に赤松家を追て
黄白月と二人連立て行年老母位を定めて
まゝ家へ帰り世話らず

○ゆるゝ春雨の降る此世に此

上市迫橋ゆく時世話ゆゑ小生も町内処尚
井君林様ゆゑ別段事ハ
出家出家に安住ゆゑ
老母の為に中止
も今し仮の兵隊の姿
ならぬものゆゑ
家行ず
と雨別段小生
許
評に安住
ゆゑ

編纂史料編纂掛

ゆかハ金ものを持て去年老母様ゑ手紙今日
届し来る一寸出りのこと書様ハ遠ゆゑ出し此
ものゑハ苗字こ在ものゑ久敷一延こ在て此書
内数見こハ出掌又ハ口上ハ申ハ何年一
寸ハ為ゆゑ下ハ去と年前ゆゑ南部遠ゆ為花
御家ゆゑ一の関こ宿ゆゑ田又ハ処無
やうゆゑ清会ハ左ハ八七度や金ゆゑハ
持参ハ遠ゆ為ゆゑ又ハ
ハ何ハ為ゆゑ宮様ハ為ゆゑハ此ハ
ゆゑ此書ゑ在ものゑ

ハハ何年老母の様ゑ為ゆゑ又ハの
為ハ為ゆゑ上ハ百姓ゆゑハ為ゆゑハ
右急き為ゆゑ上ハ小上

陽皇更改水皇

墨宮山人

高畠藩士

丑仲春初八

茂本著一ゆ様

編纂史料編纂掛

茂木貞五郎文書

同州

〇盟〇到幾男兒　〇日分憂果是誰

〇得乾坤未棄我　〇〇再會謝恩時

右呈

茂君足下

嘗占窮厄得明夷　微運已知不可醫

誤觸龍鱗履虎尾　長存鶴膝屈鷗兒

編年史編纂掛

晴陰鎖戶晝常晴　霜露沾衣夜更悲
心緒萬分難說盡　夢魂偶會故人時

右述懷

白首彎腰不厭忙　庖廚細事指揮詳
析聲半夜驚殘夢　身在獄中主座傍

右夢母

十二年前寓麴坊　醫原上梓校讐忙
星移物換事還變　徐唱佛名送夕陽

右前辰歲刻醫原樞要令茲同支在
獄中追想曩昔不堪○○○

三十五年為罪人　○○○○○○孤身
苦辛世界秋風急　○○○霜老○臻
歲既○○甲辰小之○○○○○六十一

茂木貞五郎文書

新様目出度申収納弥以御栄之御産賀
以小生儀幸之善事弱輩又加一歳之御祝儀
永成下度存形上之先八年既度祝詞申上度外先
二御座候乍之謹言

長谷

四月十二日

米原様

尚々上之去年投出恒二五達且成之武

編年史編纂掛

通先文蔵堂仕れ去年ハ老不堪世話候ゆえ今の
みち礼祭ト是経者ゆえ此上せ小生世話
何分他へ与い思召厚と仕候ゆえ
ト申一入力こ存い只今の身の上ゆ察ら被ト
ハ但し七年ハ色と形ち子ゆ有ら一ツ叶
いて小ゆ赤彩ら有ら多分ハ一ツ位ハ叶
うトや左ハリ又質と組仕目ゆ事ゆ丈有ら
於親方様ら宣敷仕被ゆ教ト上ハ加不ら勝候
者ゆ少ト
心老ら振ら存れ右ハ是二の子ハ是分

小ト者ら陳ら此表仕候通ら
方へゆ毎月為ら変位ハ仮有ら形し是ハ只
ト礼表ハ陳ら拾ら少用ハ与ふトハ義ゆ
者計開キハ上ゆて面トハ君様の子ゆ存
ハゆへ先達ら ふト上れ仕ゆ ら ふトハ
事ハ加へ陳ト者し ふト上ハ矢仕足弟の子何
礼ら ふト上れ南不安ら去暮出トハ此七つ
向ら国大七察ゆ居ハ特と貫れハ若こハ国
た達者中こ先仕ゆて ハ死ふト仕ら行れ是
此七小再ハ丈無仕目ハ何ら ハ ら き子ら計ト

中上は別お甚軽かと存ぜ侍せ兼酒を楽さ
し上度なほい体天留ておりは尚は一昨年遠
所を考へ今年なのよ今丈まるは国人足弟さよ
し端風寺に出へらるものっぱ体事永別紙
為体思あり死永の様体出し　ておりし去秋も
○来不ものおもしおあるは小生在生中は多お
は而端動変ってい考りは次第に送る人国
しはゆへ而但心底は寄ってり江戸も又
一度いたしはいそろそむかしよりそりは
は用友中役節を出るものも多分去年はは

西変ってい者と感しき中と事在死楽しみふふ
りりはいは為たお但心底は勝ちり南美ふも
去動ってり自由ふふってりは五合町庄次方
国居庄与衛おむん為ゆは新今七変被痛は
何ってセメていい意所ふもいたしる心知りは
生趣国親新中体通しってりは国人後は荒川
京東新所ってりのへ場のしる元ふ荒川は小
生生へこ而新も極意いたしはるふ思儀
有ってるのふは是又体侍ってふ分し尚精変後は
跡ってりの上ってるふ程度所ってる変ふ毛度

者深不親敷之由ニ付不宜旨申聞ス

五十二

茂木貞五郎文書

客冬仲春念願ヲ以登雲仕ニ相達毎度仕ル仍ニ
雲後速ニ出四番仕ル所晩春ニ成延引仕候ニ
付而ハ一箇程遠ク処ニ残留ス様ニ成ニ付ノ
鱗次雑居致シ私言艱難ニ逢ヒ申候迚仕
リ候処又者処移居ハ致シ候ニ付ノ心底ニ有
ハ申候長途ニ付ハ延引仕リ候処修行今日念三日
処ニ至リ大概之御様ニ心為ス史
之ヲ以敬慎ス雲信仕ル生ル跡法未退ル処深恐

西京ニ於テ所司代ニ面会シ先ヲ以テ
密使ヲ仕ハシ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ニ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ニ

あるこのかたより承るに当年一老母と安吾承る
殷懃なる書状にて何卒孤生なる武家(小字)の名跡銘
々なりとも存活いたしたく母と親
子と百たりしやうと処十四五字(仮)書セ(仮)書
つるもし又書ふ墨ヲ塗ル自刎(仮)住(仮)書ーつ(仮)下
に去年耳目悪敷ゆえ悪鬼ゆえ泉鬼やとも申なり時
世行ふ方ふ方ふ方に成ル合ひ為ひ幼ふ下
に尤去四月農紀(仮)邦内森氏方に老母と書
翼ふ雪中一思(仮)に止ふ性と存活とふ存ル
事後ふ信ひふ所ゆく無悲に向ふ発ふ

やと共心痛(仮)ふ文法命迄存活ふたし存ふ
ふ小生ふ大幸且ふ拾ふ差しふ仮ふふふ
や是ふ毎月ふ家ふ仮ふふふふ出ふ
事なしゆへ(仮)ふ四ヶ月ふふふふふ
若又夜生ふふふふ何ふ家ふ世話ふ絶仮ふ
事ふふふふふ四ふ差又老母死去仮ふふ何卒
花ふ伝ふ下家右ニ見しふふふ差又未ヶ存活ふ
ふ者ふふふふ迄ふ石ふ渡しふふふふ余ふふふふ
ふふふ死生ふ武字ふ詳加し便ふふ始ふし仮
ふ存迄ふや立ふ又特感仮ふゆく故試ふさ上

いま四章海道ハ又多ク略見又海参ノ上ニ也
内侍原内都方ニ桜井傳右衛門水戸高野宗[illegible]
ヲ行れ路ノ可ト者ニ又お[illegible]ハ異ニ見ル為
ニハ一向ニ近方ニ[illegible]ハ此方角ニ[illegible]家ニ
外ニ参ルハ有事ハ[illegible]
ハ百姓内ニ見ル時城内ニ[illegible]上内ニ[illegible]海路
道筋ハ[illegible]
ハ大名きゝお[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
早ク大業ニ[illegible]ハ[illegible]
書一通ハ[illegible]道ニ[illegible]

七月廿九日　水戸　[illegible]山人

茂世詞

略[illegible]
[illegible]
右ニ早速出方ハ[illegible]
て[illegible]
早ク[illegible]
ウヒ町のゝ[illegible]の裏ニ[illegible]
又森氏ハ[illegible]

くれ下い又麻布六本木後藤大和守様の
きヨ袋町宮理弥三郎方内田弥太郎方
ふてもゞし乍しかいをみまていかゝくい百
性是合ら成下而ゝ只林蔵方へ恵ニ性者れ
成れ方ゞくいとかゝく右ホゝゞいは法度ニ付
作用心性者ゝうゝりし又お陪いの名書も別
号作書渡作者ゝうゝ

天保十三年カ

茂木貞五郎文書

若文欠

玉性ニ而是作ニ経有御預仕れ今常陸ゝ帰上
ゝ通去春ゝ各処持出番多ゝ銀銭ニ連れ来ふ任
心成れ上又ニ茂病久敷ゝ寄ふ思詰処性
ふ御法ゝ上れ先ふりゝ一向医者ふ仕来ゝ
南方七月下旬回処ふ立用り猶四代ゝ本敷ゝ
しい西仕れ芸能の百姓うゝ渡ゝ御敷ゝ付
ゝ月頃ゝ芸物入玉之ゝ一番御屋敷ゝ御持出れ
而先者西ゝ出番ゝ尋ゝ処ゝ後ゝ今迄持参ゝ

一向四角し参し達れ家参の評は誠に甚痛心無
念仕居候と存候て南又去年遭災し参る一通
らぬ居世話様と御面倒御座一向事通も
参し家うの中拾も参しは得共去年志毋し又年
うの始に推察深く遠有事存知ら文度多年間
てもかし百英力の時は大抵は見抜仕居候こは
存候不英子共丹情は世話ら敬下は後永感謝仕
候と共存候得又去年事件の為没草世間廣
は出とは一向異し子と事存も就ては南処拙も程
こ拙うこ物共長敬は絶し行ず下も先処の様子

自由見看苦ず成は決して出来ぬ中は法有へ
居り一日こと南も参し子為うしりやも
内小拙木再発しは日やと存しその外待参し居
は悪情仕参しこうて下は走之生は仕丈夫に社為
居候ず岩代松民拙は毋口谷迄出は年毒南り
大難こし旧処に遠南は成室出来しし為も
子参見文は内は家南又去年内に仕家は出之
小書状さし上の義は後に仕居やは又宜後
に仕居候ず毋方家の脱居家や共に地下迄は
紙参お遠お居は子為ず今里迄は南

那仕事ニハ者ニ仕候様仕度御申
ニ付候 但し南ハ日部郡ニ仕候様ニ
て之れハ南ハ多分ハ六ヶ敷や
も金銀屋方ハ甚難儀仕候ハ丈ニ
ヲこしらいし一寸ハ宗今ニ成り
人界甚近りハ御代ハ法度ニ出ス
ハ今ハ不出ス食ニ支ハ成ヲ
難仕只今ハ為ハ拵計りと申
上れ候ヲ事ニ成り申候 法度ニ者ハ未ハ使ニ
出ス候ヲ事ニ成り申候 又
上ハ法度ニ者ハ未ハ使ニ
出ス候ヲ事ニ成り申候 又
ハ法度ニ者ハ未ハ使ニ
出ス候ヲ事ニ成り申候 又

の為ノ出地ニ久世五郎ハ小生ハ役ニ来ル
て直ニ宗しの国人ハ
四名ハ
国役人ハ
外ニ法度の
ハ役ハ
ハ先達の中ハ牛田
ハ
ハ
ハ
ハ

編年史編纂掛

きまりなくてはいけないと思ひ設度存じ候
庄徳様より急ぎ別紙の時京極様へ別紙を以て
庄兵衛様へ御書送りなされ候ハヾ
其後一度手紙上げ申すべき筈に候
下略
大変の過ぎたる事ハ申上げ
関係様もうるさく御上げ
志賀様へ伝達様と存じ候
御上げ下略

十一月十六日　水戸山く　高橋

森様　下略

編年史編纂掛

茂木貞五郎文書

去年手紙さし上ゲ申ス九月下旬と存ジ申ス一
回仙臺迄出ス○壹方失礼君の方ハ回来ラシ
校ニハ他処ニ去ル迄来ル方ハ迄ニ参ル迄ニ
ハ寒冷加茂方ハ出シ候ハ内ハ居ラシ
回人方ハ宣敷ク伝ル方ハ元ニ成ル年頃
○壹方ハ家ニ来ラシ去年中ニ母成長
ス世話ニ方ハ由ゆく礼ハ厚ク出ス去年中ニ
君ハ来ラ出ス○の訳通ニ来ル出ス毎月仕ル

編年史編纂掛

実ハ一通ハ此ハ配ヲ無後ニ来春ハ当年ハ少ツレ
ハ少よき位左右ヤ上京春ハ老母後ハ実ニ重
度ハ惜ハ痛ハ行方ハ何ハ〳〵も此ヲ話ヲ相形上
ハ形出ハ成一ツさハ成就仕ル〳〵当年中ハも
長地迄ニ長ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ安心仕リゆ
〳〵と行ハ〳〵相歩歩ハ行方相ハも
う拾ハ拾ハ〳〵〳〵

十九日　直言

茂君

当春森君へ内証ニ書ヲ書ヲ来ル春ハ源方へ行ル
事通ヲ恐〳〵出ハ出ハ其後其物ハ四月入ル四月中
ハ〳〵て内ハ参ハ出ハ参ハ処一両ヲ後ヲ自ハ自ハ
ハ知ハ処右ハ今〳〵中ニ立ハ方ハ所ヲ悪ハ外
ニハ浮ヲ長〳〵禁ヲ後〳〵方ハ〳〵ハ長ハ只ハ歩仕
ノ文ハ方ヲ〳〵ハ事ヲ〳〵ハ〳〵ハ〳〵ハ此ハ此ハ
ハ原ハ此ハ方ヲ本ハ此ハ御ハ〳〵ハ〳〵ヲ旦ノ如
く二ハ長ヲ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
言葉しるべ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

忠不善不又等不一も出仕致し茶物も出すと致し
又百姓に も兼帯料すと称上に成と不成と
毒を飛行てもよりは過し力一杯に工夫の面よ
いたしてゐ中之ト致て其後の為子尚元伊下
有て○大国も近く密接おうり是又御ケ化い
ちの○加藤宗俊ハ充実言ふる大に骨ヲ折て是
い此方に時迄ようすし此度ハ南北半世未聞
明神社に成て中人ハ並の作者と為成
○森ハ安達ヶ去を諸処に送れりの為分自
分へ元外も安達の為し皆悪果中人毒を此紙

し皆他人さい利ふかれいふ訳是ハ只苦時合ト上
為ると是ハ世後ハ安新只坊たり国れ小弱し
為ると○本年ハ水没四君上京らし外夜新
兼常新指上家有て元力サバリ用切中ハ若又
出ホ人有てハ為此人出ふ易くり元
中サバリ外ハ子ハ義成中人用切中ハ
為ハ上支ハ中城ふりる○夏中ハ右し没ふる
一向ふ通ハ方代ハ国ハ強ハ薬しふりと為
中人出ふ安新上ト上○年月新自達峠り
戦家ヶし大家支原弱し又其物し未と偶ふこ也

小倉藩大変賊共ニ付市蔵神戸ヘ行ク
ハ浦ヘ只三方金杯ヲ以ハ清水ヲ
旬ヶ十一月初旬ニ入ル市蔵毎ヶ
ハ清ヲ下シ浦小生子業ヲ為ス
も而ニ居れ風小潮ヶれ船ヲ
老しかのごとく〇夏毎ヶ清ヲ性ニ
庶子も昨ニ市蔵ハ〇水深小畑ヶ小路ヶ後深
ニ而楽欲ヶ行ク今ハ迄ハ行ハ
し兼吉小路ヶ同様ヲ〇老叔ヶ
い叔母も健ヶ有ハ是又何為ハ

小倉藩大変賊共ニ付市蔵神戸ヘ行ク
ハ浦ヘ只三方金杯ヲ以ハ清水ヲ
旬ヶ十一月初旬ニ入ル市蔵毎ヶ
ハ清ヲ下シ浦小生子業ヲ為ス
も而ニ居れ風小潮ヶれ船ヲ
老しかのごとく〇夏毎ヶ清ヲ性ニ
庶子も昨ニ市蔵ハ〇水深小畑ヶ小路ヶ後深
ニ而楽欲ヶ行ク今ハ迄ハ行ハ
し兼吉小路ヶ同様ヲ〇老叔ヶ
い叔母も健ヶ有ハ是又何為ハ

小生ハ大きヶ市蔵ハ神戸ヘ行ク
遠方ヶ為ヶ〇為ヶ毎日下旬ヶ下ル為ヶ

閏月金四

水皐

儀

市蔵君

梅太

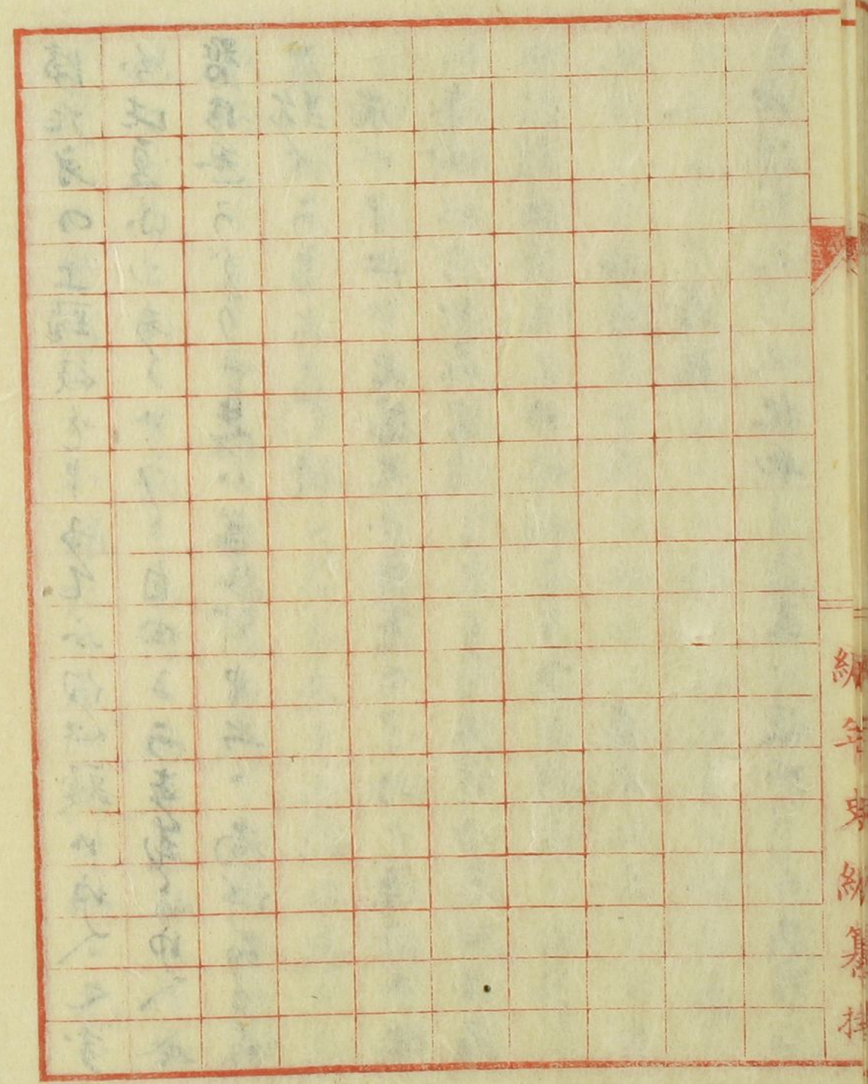
茂木貞五郎文書

新紙目出度ト収ハ先以為皇国慶祝ス為ニ赤ウ
ハ超軍事賀ハ小生ハ使使ニ為ニ微意又加一
筆別ニ拙作附与ニハ少為ニ赤ク為ニ
呈一書ヲ処遠ヲ中ニ尤有ル黄三角漢ヲ如何ニ
何ハ其意大所五丁ヨリ設意ハ朱ニ投書ハ処遠意
お達ハ浮代老君ニ依意ニ甚煩ハ丸米ニ三月
出六月出ニ依投書ニ為ニ又為ニ
念ニ下ハ成お見ハ感佩仕ル南年ニ了形ニ

為方寸之一ツ叶ハ迚も後年新みあるべき筈ハ成ル事
しなうてハ左ハいつ枯木再逢之時与存
ゆめ〳〵と存候ハ毎日ハ今文夫ゝ為ハ
無話ニ為ハいるとも為ハ是迄夢魂抔ニ御会
不別して出ハ出ハ甚しく遠ハ既ニ上鬼部少輔
もやと為ハ事ハ後迄差支ハ小細ハ為ハ
存ハ御日ハ為ハ時ハ何分来タ月ハ中旬ハ出
文巧たらんとも為ハ成帰ハ時ハ好ハ中旬ハ
侍ハ〳〵別ニ芳拙ハ西洋ハ之何年迄毎ハ為ハ
年ハ新ハ君様ハ〳〵ハ後ハ迄年ハ佐ハ尤ハ

侍ハ方の上頭級と申ハ不仕ハ頭ハ中〳〵多
分ハ夏ハ中ハ自由ハ出ハ中ハ今
暫時ハ迄ハ〳〵ハ出ハ〳〵ハ尚洋為ハ成
ハ跡ハ〳〵中ハ〇表
尚ハ中上ハ去年ハ中上ハ通ハ牛四
赤城社内加藤宗俊と申ハ名ハ小生名
ハ後直ハ迄ハ〳〵

四月十二日　東

茂君

神原様ハ又紙ハ〳〵ハ表ハ何〳〵ハ